

編集発行:西宮市立子育て総合センター 研究研修チーム

〒662-0853 西宮市津田町3-40 西宮市立子育て総合センター内 ☎:0798-34-4152 Fax:0798-35-8001

URL : www.nishi.or.jp/homepage/nobinobi/ E-mail : vo_kosodate@nishi.or.jp

西宮市幼稚園・保育所・小学校連携推進事業「つながり」

本市では平成16年に「つながり」事業が始まり、今年10年目を迎えました。この間、幼児と児童との交流活動が定着してきており、教職員の幼保小の連携に対する関心も徐々に深まってきました。そして、本市全体の取り組みとして、交流活動のカリキュラムへの位置づけを図ることが次の段階への課題となってきました。交流活動については、子ども同士がもっと触れ合えるような活動を考え、互惠性のある内容にしていく必要があります。さらに地域の中で、教職員同士が子どもの姿を通して、身近に話し合うことが幼稚園、保育所、小学校の子ども理解や指導の改善につながり、教育・保育の質が向上することになります。

そこで、次の一步に向けて、今年度は「つながり」検討会を発足し、教職員向けのリーフレットの作成に取り組みました。本市の就学前教育と小学校教育が連続性、一貫性をもってつながり、確かな子どもの育ちを支えていきたいと願います。

～「つながり」検討会の報告～

小学校、公立・民間保育所、公私立幼稚園から構成されたメンバーにより、教職員が子どもにとって互惠性のある交流活動が実施できるようなリーフレット作りに取り組みました。また、平成26年度は、幼保小が参考となりうるカリキュラム作成に向けて検討を重ねていく予定です。



「つながり」研修

【第2回】10月25日(金) 講話「育ちと学びをつなぐ幼保小連携 ～目的を共有した連携、そして接続に向けて～」

講師 : 奈良教育大学 教育学部 掘越 紀香 准教授

参加者 : 76名 (小・特10 幼30 保36)

ねらい : 連携の取り組みで目指す子どもの育ち、教育・保育計画への位置づけ等について研修し、その目的を共通認識する。そのことで、本市全体の取り組みが、次の接続段階へステップアップする足がかりにする。

内 容

□保幼小連携と接続期

- ・本市の子どもの交流活動は随分進んでいるが、互惠性・継続性が重要で、基本は子どもに任せるが、教師はつなぐ援助が必要である。そして、大人の交流も大切であり、子どもの姿を共有し、話し合いで成長を確認し、次につなげる。また、気軽に情報交換できる関係づくりと、日常的に話し合える機会も確保する。
- ・幼保小相互の立場を大切にして、教育課程や指導方法等の違いについて理解し確認をする。
- ・発達と学びを連続させるためのアプローチ・カリキュラム(年長の10～3月)と、スタート・カリキュラム(小1の4～5・7月)を共同で作成する。また、それらによる授業参加を、着手できることから始める。
- ・同じ活動でも、幼児と児童は異なる学びをしている。異文化同士の交流は豊かな学びにつながる。

□自己調整

- ・自己調整は、自己主張・自己統制・協調性・好奇心に関係している。学校で仲間と共に学ぶには、幼児期・接続期に自己と感情との調整を学び、身につけていくことが大事である。そのことから、自己調整が「学びに向かう力」と捉えられる。
- ・幼児期は学びの芽生えの時期であり、児童期は自覚的な学びの時期である。

□まとめ

同じ活動でも、年長児と1年生ではそれぞれの取り組み方に違いが見られる。年長児の思考錯誤する姿が小学校以降の学びにつながる。子どもが何を経験したかを大事にする。教師の関わり方で、子どもの気づきや学びが違ってくると互いに理解したり、幼児期の学びに向かう姿を小学校に伝えたりすることが大切である。

参加者の感想

- ・連携を深めるには、やはり日頃の様子を互いに伝え合い・理解し合うことが必要不可欠だと実感した。
- ・5歳児後半の保育の中で、子どもに「自分で考える力」や「自立調整力」を育てられる保育をしようと思う。

【第3回】 1月16日(木)実践発表と意見交流：「育ちと学びをつなぐ幼保小連携 ～実践から学ぶ～」

実践発表：西宮市立苦楽園小学校 藤田 侑美 教諭

パネリスト：西宮市立北夙川保育所 飛田 摩耶 保育士・西宮市立越木岩幼稚園 江上 道子 教諭

コーディネーター：奈良教育大学 教育学部 掘越 紀香 准教授

参加者：88名（小15 幼31 保42）

ねらい：他校園所の実践から連携の取り組みの方法について学ぶ。子どもや教職員がつながることの大切さへの意識を高め、自校園所の取組みを振り返って成果と課題を明らかにし、今後に生かす。

内 容

□苦楽園小学校の実践報告（藤田 教諭） [1年生と越木岩幼稚園・夙川宝保育園5歳児との交流]

〈事例1〉生活科「どんぐりひろいをしよう」（11月）

“幼稚園や保育園の人に学校のことを教えたり一緒に遊んだりして、自分自身の成長や小学校の良さに気づく”ことをねらいに実施した。事前に、どんぐりのおもちゃを考え、招待状をつくる等の準備をした。当日は、自己紹介やおもちゃ紹介の後、一緒にどんぐりのマラカスをつくり合奏をした。園児と関わる中で、年上として優しく語りかける1年生の姿があり、来年は2年生という気持ちが芽生える機会となった。また、学級を超えた児童理解が図られ、児童の新たな良さや課題を見つけることができた。

〈事例2〉生活科「たこあげをしよう」（1月）

当日はグループで開会式、その後凧上げを一緒にした。前回より打ち解けるのが早く、向き合った活動となった。園児への声かけも上手になった。

◇交流した越木岩幼稚園からの園児の様子

- ・1年生からの招待状に喜び、期待をもって当日を迎えることができた。
- ・北夙川小5年生とも交流をしているので、学年の違いによる接し方に戸惑う様子が見られた。
- ・1年生が紹介してくれた自然物を使ったおもちゃに興味をもち、園で身近なものを活用しながら作っていた。生活や遊びの中に取り入れようとする姿が見られた。

□北夙川保育所の報告 ー北夙川小5年生とー

- ・1回目は保育所で行うので、安心して5年生を自分から誘い得意気に教えていた。2回目は、学校探検をした。3回目は、ミニ音楽会に参加し、5年生の演奏を聴いたり大勢の前で演奏したりした。
- ・保育所では、年長として年下の友達から頼られているが、交流の中では5年生のリードに素直に頼ったり甘えたりする姿が見られた。

・5年生から“何をしたいか”を尋ねられる場面もあり、自分の思いを言葉にして伝えることを体験した。

◇交流した北夙川小5年生の児童の様子

- ・1回目はどう関わったらいいか戸惑い、2回目の学校案内では、幼児が入学を期待できるように、学級ごとに、児童が計画・司会・進行を行った。
- ・幼稚園・保育所の子ども達が喜んでくれたと感じたり、反対に思うようにできなかったという気持ちも抱いたりした。

□意見交流の中から

- ・今後は、どのような力を育むのかという共通視点を持ち、同じ土俵で子ども達の成長を支える役割を果たす。
- ・円滑につながるための力とは何かを探り、取り組んだことを、次の担当者に必ず引き継ぐ。

□総括 掘越准教授より

◇交流活動を教員・保育者の研修の場とする。

- ・子どもの姿を共有し、子ども理解を深める。
- ・幼保と小の子どもへの声かけ方・援助の仕方の違いを意識する。
- ・取り組んだことを記録（写真も）に残し、次年度に引き継ぐとともに取り組みの深まりに活かす。

◇日常の授業・保育につなぐ。

- ・互いに、見て真似する・考える・コツを見つけることで幼保小の連続性に気づき保育・指導に活かす。

◇活動内容を検討する。

- ・一緒に活動が出来る内容・教材を考える。
- ・継続するために検討した取り組みをカリキュラムに位置づける。

※保育者・指導者自ら、子どもの育ちを学び、育ちと学びをつないでいくことが大事である。

専門課題研修

【第8回】 11月26日(火)講話「モンスター・ペアレント論を超えて ～保護者と向き合う気持ちと教職員の共同性～」

講 師：大阪大学大学院 人間科学研究科 小野田 正利 教授

参加者：63名（小・特9 幼15 保39）

目 的：学校園所本来の役割を果たすために、教職員がどのように保護者と関わっていけばよいのかについて学ぶ。

内 容

〈記録をとる〉事故・いじめ等が学校園所で起きた場合は、双方の事実を確認し、客観的事実と指導者の考えを分けて記録に残す。

〈理由がある・ホンネを読み取る〉保護者対応がこじれる一番の原因は、教職員の説明が保護者の願いに応え切れていないことにある。要求の背景にあるものの98%は、保護者の立場に立ち、向き合う気持ちと共同性を表す等で把握はできる。

〈モンスターではない!〉学校園所に不当要求をして困らせる保護者のことを“モンスター・ペアレント”と呼ぶことがある。教職員がこの言葉を使うこと自体、親と向き合う気持ちを失くす行為であり態度にも表れる。

〈学校園所で解決できないケースもある〉①生き辛さや葛藤を抱えている。②違法行為や不当な要求を繰り返す。③原因が目の前の問題にあるのではなく、保護者の過去の様々な経験が主要因となる三つの場合である。解決の出口を見出すには、①②は専門機関（保健所・児童相談所・カウンセラー・弁護士・警察等）に相談する。③は、教職員が人と人との様々なつながりを活かして解決の道を探っていくことである。

〈ギリギリの同僚性〉研修を積んでも、同僚性や共同性は生まれにくい。職員室の雰囲気がいよと会話も弾む。



他愛のない会話で笑いや涙を分かち合ったり、愚痴や悩みを聞き合ったりすることが“ギリギリの同僚性”を生む。最後の支えとなる“同僚性”が学校園所にあって欲しい。

〈キーワードは 70%〉子どものことを中心に、会話を絶やさないこと。いつも相手を 100%の力で受けとめないで、70%で受けとめるゆとりを持つ。

参加者の感想

- ・どうすれば職員同士よい関係でいられるか、保護者とどうキャッチボールをしたらいいのかが少し分かり、これからより意欲を持って仕事ができそうです。
- ・保護者対応をうまく進めるためにも、今ある職場の仲間を改めて大切にしようと思いました。

チャレンジ研修

【第 8 回】 11 月 30 日(土) 講話・実技「すぐ使える『楽器遊びのネタ』『合奏の指揮法・指導法』」

講師：佛教大学教育学部 高見 仁志 准教授

参加者：30 名（小・特 1 幼 6 保 19 他 4）

ねらい：楽器演奏を中心とした内容で、保育者自ら実技を楽しみ、子ども達への効果的な指導方法を学ぶ。

内 容

1 ピアノの音を聴く遊び

2 人組になり、ピアノの音を聴いて動く遊びをする。このような遊びを繰り返すことで、楽器遊びの時に音が揃うことにつながる。

2 手遊び

「でんでんむし」「しゃくとり虫」「ごんべさんのあかちゃん」の曲で遊ぶ。保育者の説明は、リズムと音程に乗せて、遊びの流れを止めないようにすることが大事である。

3 楽器遊びの方法

歌えたリズムは楽器で奏でることができるので、「おもちゃのチャチャチャ」等、擬音語・鳴き声・スキップ等の入った歌を使う。保育者の言葉を真似る交互唱から、楽器と言葉、楽器のみという交互奏へと進めていく。子どもはリズムを取りながら聴いているので、自分で奏でられるようになるための過程である。

4 楽器の扱い方の指導

楽器の持ち方や鳴らし方は教えることから始めないで、活動の中で機会を見つけて伝えるようにするが、片づけ方等のルールはきちんと教える。例えば、カスタネットの叩き方を、言葉で指示するよりも、「♪おいで♪おいで♪いい音出たおいで♪」等のリズムに乗せた言葉で打ち方を伝えるとよい。また、鈴の鳴らし方では「♪サンタさんが近づいてきたよ♪（強い音で）、♪遠くなっていったよ（弱い音で）♪」等と、音の強弱をイメージできる言葉で伝えると、子ども達が楽しみながら楽器遊びに取り組むことができる。

5 合奏指導のコツ

- ・同じパートの楽器をまとめた楽譜に作り直す。
- ・休止中のパートの子どもも指揮に注目させて、音楽の流れに乗るようにさせる。
- ・歌のある曲は歌い込ませ、ない曲は聴かせて耳に十分になじませる。
- ・特徴的なリズムは足や手を使って全員が打てるようにする。
- ・盛り上がる部分から始めることも方法である。
- ・幼児の社会性は合奏によっても育まれる。

参加者の感想

- ・ふだん当たり前に行っていることを、意識づけられたり、こんなやり方もあったのかと教えられたりしました。
- ・リズムを伝えなければと頭を固く考えていましたが、「まず楽器は楽しいということを伝えていく。」の言葉にハッとしました。今度は、もっと身近な歌から楽しく取り入れていきたいと思えます。